令和７年度

# 地域の寺子屋推進フォーラム

# 報告書




地域の寺子屋

令和８年　３月発行
教育委員会事務局　生涯学習部　地域教育推進課

**日　時**　令和7年12月21日（日）　14：00～15：30

**場　所**　高津市民館12階　大会議室

**主　催**　川崎市教育委員会

「地域の寺子屋事業」

川崎市教育委員会では平成 26(2014) 年度から「地域の寺子屋事業」を実施しており、すべての市立小中学校での開講を目指しています。

今年は「寺子屋活動がもたらす心と体の健康」をテーマに、東京都健康長寿医療センター研究所 副所長 藤原佳典先生による講話、市長･教育長･寺子屋コーディネーターを交えての寺子屋トークセッション、寺子屋川柳の作品表彰、寺子屋紹介パネルの展示（会場内外）などを行いました。

Colors, Future!
いろいろって、未来。
川崎市

## Program1　パネル展

現在開講している各寺子屋の学習支援や体験活動の様子をまとめたパネルを展示しました。
また、寺子屋に参加する児童生徒・寺子屋関係者から募集した寺子屋川柳の入賞作品もパネルにまとめ、来場者にご覧いただきました。











### 開会挨拶　川崎市長　福田　紀彦



皆さん、こんにちは。今日は、日曜日の午後ということで、もう年末、今年はあと10日しかない忙しい中、フォーラムにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

寺子屋も、始まって12年目ということになりまして、なんと今では102校に広がり、そして寺子屋先生は1,300人にもなっているということで、本当に皆さまのおかげで地域の寺子屋が市内各地でできているということ、子どもたちも大変喜んでいますし、また参加いただいている皆さんも、自分なりに何か生きがいのようなものを感じていただいている方も多いのではないかと思います。

今日は、寺子屋がもたらす心と体の健康についてということがテーマですから、その分野の専門家であります藤原先生に、今日は後ほどご講演をいただいて、そしてパネルディスカッションをやることになっています。

今日は寺子屋川柳も、毎年すさまじくいい作品が出てきていますが、今年も素晴らしいものができているということで、いかに子どもたちが寺子屋を楽しみにしているかということが、わずかあの少ない言葉で表現されるのは、すごいことだなと思います。今日はまた、お互いに高め合うようなフォーラムになればいいと思っていますので、どうぞ最後までよろしくお願いします。ありがとうございました。








## Program2　寺子屋川柳表彰式




事前に寺子屋に参加している児童生徒や、寺子屋コーディネーター、寺子屋先生から、寺子屋に関わる川柳を募集しました。

児童生徒の部1,210点、大人の部190点の応募があり、その中から12点の作品を入賞作品として表彰しました。

## 01 〈 児童生徒の部 〉表彰式

### 入賞者・寺子屋川柳入賞作品

| 寺子屋名 | 学校名・学年 | 氏名 | 川柳 |
|---|---|---|---|
| 遊びと学びの寺子屋 | 中野島小・1年 | 稲葉 健太 さん | 金ようび　えがおあふれる　てらこやだ |
| ひえばらてらっこ | 稗原小・2年 | 若佐谷 陽菜乃 さん | えんぴつが　みじかくなった　てらっ子で |
| 寺子屋ゆりっ子 | 百合丘小・3年 | 福重 愛和 さん | てらこやは　たのしいおもい　つまってる |
| 寺子屋いぬくらっ子 | 犬蔵小・4年 | 木村 蕗 さん | 寺子屋で　まなびのたねを　育てるよ |
| 寺子屋ひがしすげ | 東菅小・5年 | 梅田 陽菜 さん | 楽しみで　ない日に来ちゃった　寺子屋に |
| 寺子屋西中 | 西中原中・3年 | 滝田 博斗 さん | 寺子屋で　過ぎる時間は　有意義だ |

## 02 〈 大人の部 〉表彰式

### 入賞者・寺子屋川柳入賞作品

| 寺子屋名 | 役職 | 氏名 | 川柳 |
|---|---|---|---|
| 寺子屋あさだ | 寺子屋先生 | 大湊 さとみ さん | 流行もの　寺子屋の子らに　教えられ |
| 寺子屋東小倉 | 寺子屋先生 | 中屋 真理 さん | 君等には　まだまだ負けぬ　「神経衰弱」 |
| 寺子屋つっちー | 寺子屋先生 | 古屋 マミ さん | 今時の　子どもたちから　令和知る |
| 寺子屋宮崎小 | 寺子屋先生 | 古川 達弘 さん | 音読で　未来の声優　見つけたり |
| 寺子屋東生田 | コーディネーター | 森　一美 さん | 寺子屋で　そっと上げた手　花紅葉 |
| 寺子屋中野島中 | 寺子屋先生 | 村田 裕治 さん | 寺子屋は　皆を励ます　応援団 |

### 川崎市長　福田　紀彦　総評



本当に素敵な川柳をありがとうございました。楽しさが伝わってくる。「ない日に来ちゃった」って、もう本当に、この一言で全てを表したなという気がします。また、大人の皆さんには、子どもから何か教えてもらうような感覚というものと、かわいらしいなという、紅葉に例えるような歌もあったりして、本当に、子どもたち、お互いに、好きだなという気持ちが伝わってくる素晴らしい作品を作っていただきました。

また、この作品を見ると、寺子屋のよさが多くの人たちに伝わるのではないかなと思います。本当にありがとうございました。

# 寺子屋活動がもたらす心と体の健康
## シニアが開く三方良しの地域づくり

司会

今回のフォーラムのテーマ「寺子屋活動がもたらす心と体の健康 シニアが開く三方良しの地域づくり」について講話をいただきます。

私から講師を紹介させていただきます。本日の講師は藤原佳典さまです。藤原先生は、東京都健康長寿医療センター研究所副所長として勤務されながら、多世代共生の地域づくりの視点から、高齢者の社会貢献の多面的効果についてなど、実践的な研究を進めていらっしゃいます。また、内閣府・厚労省検討会委員他、多数の自治体の審議会座長を歴任するなど、幅広くご活躍されています。



### 東京都健康長寿医療センター研究所 副所長
### 藤原　佳典

**医学博士・NPO法人りぷりんとネットワークアドバイザー**
**高齢者就労支援プロジェクト　ESSENCE 代表**

多世代共生の地域づくりの視点から、高齢者の社会貢献の多面的効果について実践的研究を進めている。内閣府・厚労省検討会委員他、多数の自治体の審議会座長を歴任。

**【本市における主な活動等】**

・麻生区役所主催講演「健康長寿社会に向けて」登壇
・健康福祉局主催講演 「シニア傾聴講座フォローアップ講演会」登壇（予定）
・シニアによる絵本の読み聞かせボランティア「REPRINTS」プロジェクト（多摩区ほか都内各所で展開）
・多摩区で地域介入研究「中野島多世代つながり愛プロジェクト」を実施（地域全体での多世代交流を促す仕掛けにより、地域住民のつながりが強化されるかについて研究）

ただ今ご紹介にあずかりました、東京都健康長寿医療センター研究所というところから参りました藤原です。寺子屋推進フォーラム、私は、この寺子屋の事業自体は、20年以上、いろいろ川崎市と関わっています関係で耳にはしていたのですが、今日、初めてリアルに、表彰式ですとか、少し前にコーディネーターの方々とお話しできて、非常にすとんと落ちて、うれしいところです。

私どもの東京都健康長寿医療センターといいますのは、お手元にありますように、もともと152年前に渋沢栄一が初代院長として設立しました。渋沢栄一が設立して、日本の総合的な福祉施設の幕開けということで、それから長い歴史を持っています。最近は、非常に我々にとってもおめでたいことがありまして、先日、ノーベル生理学・医学賞を受賞されました坂口志文先生も、95年から99年まで4年間、当研究所で研鑽を積まれた、そういう歴史があります。

私自身は、先ほども申しましたように、20年以上、川崎市、特に多摩区が中心ですが、みまもり支援センターの方々などと、さまざまな地域づくりや健康づくりの事業のお手伝いをさせていただいていました。一昨日は、たまたま、「てくのかわさき」のほうで、傾聴ボランティアさんのフォローアップ講座のほうも担当しまして、その時は、90分時間がありましたので、ゆっくり詳しくお話をすることができたのですが、今日はちょっと時間が限られていますので、ぎゅっと、少しスピードが速くなるかもしれませんが、お付き合いいただければと思います。

## 最先端の健康長寿の秘訣“地域力”

最初ですが、私どもの健康長寿医療センターは、まさしく健康長寿の秘訣というものを研究していまして、既に2000年、25年前に国内外のさまざまな研究を整理して、10カ条というものを世の中に発出しています。今日は、1つ1つ細かくお話しする時間はないのですが、10カ条のうちの半分、5カ条は、いわゆる生活習慣病対策といわれたのです。残りの5カ条が、老け込まないようにということで、今日でいう、足腰を丈夫にとか、頭を活性化してというところが多いのですが、当時から、シニアにとって社会参加が健康の秘訣ということは明らかだったのですが、時代も流れまして、今から数年前に、2017年ですけれども、20年近くたちましたので、もう一回、この10カ条だけでいいのかということで、最先端の研究を交通整理しました。

そうしたところ、新たに地域力という言葉が出てきたのです。健康というのは、普通は、自己責任、自己管理が原則というふうに思うのですが、自分では分かっていても行動に移せない人が出てきているということです。これは、一番極端な例ですと、認知症の方ですとか、そういった方の場合は、頭では分かっていても実行できないということも多いですし、私どもも、実際、研究活動以外に、1日だけ患者さんの診療を実際にすることもあります。その時に、1人暮らしの認知症の方に、日頃どうして暮らされていますかとお話しすると、それなりに頑張っていますとおっしゃるのですが、お話をよく聞いてみると、おうちに閉じこもっていらっしゃる。そういった方に、例えばこういうちらしで、近くで体操をやっていますよとか、近くでサロンがありますよと言っても、なかなか自分から行ける方はいないのです。そういった時に、周りからちょっと声をかけてくださる方がいたり、あるいは、一緒に行きましょうと声をかけてくださる方がいたりということで、今までは健康づくりというのは、自助といいまして、自分でということだったのですが、これからはお互いさまの時代になってきたということです。

特に、お互いさまの力が必要なのが、シニアの健康問題というと、先ほどの認知症と、もう一つ、フレイルという問題があります。フレイルという言葉を聞かれたことのある方はいらっしゃいますか。さすがですね。まさしく、両方とも、残念ながらまだ特効薬がない。特効薬がないということは、生活習慣とか生活環境を整えていくことが一番大事だということになるのです。

## シニアの健康問題　フレイルとは




特にこのフレイルに対してですが、このフレイルというのは、元気な状態と要介護の状態の間の状態です。何が間の状態かというと、生活の機能といいまして、身の回りのことをてきぱき、生き生きとできるかどうかといった、そういう能力のことをいうのです。まだまだ人の助けが必要とまではいかないけれども、元気だった頃よりも少し時間がかかるようになってきたとか、少しもたもたするようになってきた、すぐばてしまうようになってきた、こういう状態のことです。

ただ、このフレイルは、ほっておくと、ずるずると進行してしまうのですが、頑張れば元に戻ったりとか、あるいは、できるだけ今の能力を維持できるということで、そういう意味で、フレイルというのは、早期からの介護予防、早期からの予防ということで、今、着目されているところです。

このフレイル予防というのは3つの重要な柱がありまして、1つは食生活。しっかりタンパク質を取りましょうとか、運動は、ウオーキングに加えて筋トレも重要ですよというようなことです。私は、今から15年前ですか、川崎市の中で公園体操を普及させようという動きがありまして、その時から、みまもり支援センターの方々と体操の普及をしてきました。川崎市でやっていらっしゃる公園体操のいいところは、単なるストレッチやエアロビックではなく、しっかり筋肉も鍛えるところが入っているということで、さすが先見の明がおありだったのかなと思っていました。

3つ目、実はこれが私が今日、一番強調したい、社会参加というところです。シニアの社会参加の場合、さまざまな研究を網羅したところ、私は、1回1回の法則というものを重視しています。何が1回かというと、外出は1日1回。友人、知人などとの交流、つまり、同居されている家族以外の方との交流、これが週1回以上は重要でしょうと。また、楽しさ、やりがいのあるような活動、つまり団体活動ですね、その社会活動に参加、これは月1回は参加しましょうと、これが健康長寿の秘訣ですということが分かってまいりました。

とはいえ、なかなか、特に社会参加に関しましては、自分からある程度アクションを起こさないと得られない部分があります。つまり、この社会参加の構成要素であるような、つながりとか役割というものは、現代の社会の場合、

自然発生的に、隣近所さんとか、あるいは知り合いがいっぱいできてということは、どうしても、街がどんどん変わっていったり、あるいはプライバシーの問題で、そう簡単にできにくくなっている。そのためには、つながりや役割、それを含めた社会参加が促進されるような作戦が必要だということですね。戦術。

この作戦ですが、大事なのは、やはり場づくり、そういった社会参加ができるような場が必要だ。そして、それをつなぐような人が必要だと。そして3つ目が、仕掛け、プログラムです。確かに茶話会とか体操も重要ですけれども、短時間で終わってしまったり、茶話会だけではなかなか時間がもたなかったりということもありますので、やはり皆さんがつながりや役割をつくるには、それなりの工夫した仕掛けというものが大事かと思います。私はこれは、今回の寺子屋の事業は、それを示唆しているものだと思っています。

特にシニアの方の介護予防やフレイル予防、社会参加の促進という意味では、国のほうも都道府県のほうも市区町村のほうも、それぞれ場づくりが重要だということで、これは行政用語でちょっと硬いのですが、通いの場という言葉を促進しましょうということで、先ほどの、体操の場や茶話会の場というものは、かなりの地域でつくられてきました。

## 多世代交流、多世代共創

ところが、やはりそれだけではなかなかちょっと不十分だろうとか、もっと面白いことをしたいというシニア世代の方もたくさん増えてこられまして、これからは、例えば学びの場であるとか、あるいはボランティアの場であるとか、あるいは、多世代交流、今日のメインのテーマですけれども、例えば子ども食堂を応援するというのは、シニアの方にとっては、もう立派なフレイル予防なのです。そういった多様な活動の場を増やしていきましょうということで、国も自治体の皆さんも旗を振っていらっしゃるというところです。

特に、その中で、私はそれぞれの地域、いろいろな地域を見ていますが、川崎市の強みということですね。多くの自治体が、我々の東京都の板橋区というところもあるのですが、非常に高齢化が進んでいます。

それに比べて、川崎市は、まだまだ高齢者の割合もそんなに進んでいませんし、逆に子どもをつくられる方の数も多いということで、若い町なんですね。ということは、シニアの方の社会活動の中でも、若い人たちとのコラボとか、あるいは子どもたちのためにという、まさにここで言います、多世代共創ということが、非常に理にかなっているというか、自然に実現できるような町なのではないかと思って、うらやましい限りです。



多世代が交流するということは、実際、一般の市民の方の実態調査などをしても分かってきます。これは、以前、我々が、今から5～6年前、もっと前になるのですが、川崎市多摩区の一般の方と東京の北区の方に、無作為に郵送の調査をさせていただいたことがあります。これは何を調べたかというと、心の健康ということです。どういう世代と交流している人が心の健康が一番良好かということを調べてみたのですが、例えば高齢の方の場合ですと、一番グラフが長いのが心の健康度が良好だと。これを見ますと、同世代だけではなく、現役世代、お隣の20代、40代の方とも、趣味とか地域とか、あるいはお仕事などでつながっている方、そういうシニアの方が一番精神的に健康度が良好だと。これは恐らく、若い人から刺激をもらえるとか、何か張りが出るというようなこともあると思います。

もう一つ、私が非常に興味がありましたのが、若年の方です。現役世代の20代、40代の方も、同世代だけではなく、目上の世代の方ともいろいろなところでつながっている方が最も健康度が高いということがありました。これは、いろいろな人間の本性というものを考えた時に、どうしても同じようなバックグラウンドの方同士ですと、割とすぐにツーカーで分かりやすいのですが、どうしても期待し過ぎる部分があったり、ちょっとやっかみが出たりするのです。そういうことで、やはり人間は、時にはいろいろな異なる属性、異なる世代や異なる人たちと交流したほうが、ご本人もリラックスできるのではないか、周りもリラックスできるのではないかということで、我々は、よくこういうものを、「ごった煮の地域」とか「ごった煮の居場所」というのです。そういうものが、一般の市民の方の生活の中でも重要なのではないかということが分かってまいりました。そういうことも、寺子屋というものは、恐らく自然に含んだ活動だと思います。

シニアの方の社会参加というものは、例えばお仕事をされてきた方も、少し肩の荷を下ろして、パートであったりボランティアであったりとか、趣味、稽古という具合に、少しずつ変わってくると思うのですが、私たちは、この中で、今回の寺子屋プロジェクトの恐らく源流にもなるのかもしれないのですが、高齢者の方による学校ボランティアの研究というものをやっていたのです。

## シニアによる学校ボランティア

こちらは、そのお手本がアメリカにありまして、エクスペリエンス・コアといって、地元の高齢者の方が子どもたちの通う小学校や保育園、幼稚園で、ボランティアさんとサポートするという取り組みです。本当に妙なご縁なのですが、私が勉強に行ったボルティモア市は川崎市さんの姉妹都市というふうに聞いていまして、確かに港もあって、いろいろな地域があって、いろいろな人がいてということが、似ているのだなというアメリカの大都市ですが、そこで学校ボランティアの勉強をしました。これは日本でも応用したい、応用できるところがたくさんあるのではないかと思いまして、2004年からモデル事業を始めたのです。その1つのメインの舞台が、スタートアップした舞台が、川崎の多摩区でした。

何をするかということですが、当時、学校ボランティアというと、ちょっとまだ時代が日本は早過ぎて、寺子屋の始まる10年以上前で、何かシニアの方が交流しやすいようなことがないかということで、絵本の読み聞かせのボランティアさんの養成事業に着手しました。これは今日、多摩区でも、「りぷりんと・かわさき」という名前で、50人以上の方々が、ずっと20年間、団体として活動されています。絵本の読み聞かせというと、ちょっと簡単過ぎるなと思う人から、男性からするとちょっと敷居が高いなと思われるのですが、まずはご自分の脳トレであり、体力維持のために絵本の朗読を活用しませんかというようなプログラムです。卒業した後に、世代間交流、つまり小学校や保育園、幼稚園、そういったところで、あるいは「わくわく」、そういったところで読み聞かせをされるという活動です。今、本当にこのようなプログラムが少しずつ首都圏で広まってまいりまして、次の1月から、多摩区に次いで麻生区のほうでも始まるということを聞いています。

## 本の読み聞かせ

皆さんの中で、この1年間、絵本を読んだり見たりした機会のある方はいらっしゃいますか。さすがですね。私も、ちょうど自分が子育てをしていた時に、家内が、子どもの小学校、幼稚園でPTAとして、ちょっと読み聞かせに関わっていたのですが、その時に、枕元に練習する絵本を並べていたところを見ると、案外、高齢者やシニア世代が主人公のものが多いのです。子どもが見聞きしたら「楽しかった」「面白かった」で終わるかもしれませんが、シニアの方が経験や感性で見ると、これは平和のことを言っているのだとか、これは人権問題のことを言っているのだと。最近ですと、認知症のことを語っているものもあります。非常にメッセージ性があるということで、コミュニケーションの入り口としては非常に使いやすい。しかも、読み聞かせを練習してボランティアをして、また図書館に返すということで、あまりお金もかからない、これも非常に大事なことなのです。安くて、近場で、やればやるほど深いものという、私がモットーとしている「安・近・深」というものを満たしたものが読み聞かせではないかということで、この読み聞かせをシニアの方がなさるプログラムを、みまもり支援センターの皆さんと一緒に作ってきたということがあります。

これは10回とか12回の3カ月間のコースですが、1回2時間、本の読み聞かせを勉強してもらいながら、滑舌のトレーニングとか、あるいは起承転結を、ストーリーをなんとなく覚えていただいたりというような、頭と体に効くような教室ですが、それをやっていただく。卒業した方が、地元でボランティアとしてチームで活躍されている。特に、首都圏全体では、今は600人ぐらいのメンバーがおられまして、小学校とか幼稚園とか400校ぐらいを訪問されているのですが、先ほどの多摩区でも、例えば下布田小学校さんはずっと導入されていますし、中野島の「わくわく」さんとか、あるいは、右下ですが、中野島中学校も、日頃、図書の整理とかで出入りされているような形ですが、年に何回かは読み聞かせをされているような形で、いろいろな形で活躍されています。

実際に、その読み聞かせの活動自体が、シニアへの心身の健康にどういう効果があったのかということを調査したのですが、例えば脳の萎縮、これも、6年間ボランティアさんを続けておられる方に、多摩区から板橋までMRIをさせていただいた。その結果、分かってきたのは、ボランティアをずっと続けている方というのは、脳の萎縮がほとんどないということです。恐らくこれは、その日、その日だけではなく、ボランティアをする中で、練習したり、図書館通いをしたり、今度はこの聞き手にはどういうものがいいのかなということを勉強される。また、ボランティアさんでミーティングされるといったような、ボランティアのための練習とか充電期間が非常にサイクルになっている。1週間単位でそういう活動が6年ずっと続いているということになるかと思います。ですから、脳が休む暇がないというふうに思っています。

読み聞かせの活動というと、何か文化系の活動のように思うのですが、実は体も使っていらっしゃって、7年間続けていらっしゃる方に、以前、多摩区の保健センターで体力測定などもしていただいたのですが、一般の地域の方に比べると、ほとんど体力も落ちていないことが分かりました。よくよく聞いてみると、ボランティアをされる日というのは、非常にてきぱき1日の生活を過ごされていまして、活動量自体が増える。ボランティアをする日は、中には1日1万歩ぐらい歩いてしまっているんですよ、そうおっしゃっている方がいらっしゃる。これは非常に重要なことで、我々はどうしても、健康のために健康づくりをしましょうというメッセージを出しがちですが、そうではないのです。子どもたちに会って、自分たちを磨いて、そして楽しい読み聞かせをする。そうしていると、知らず知らずに体も頭も使っていましたと。以前、リーダーをされていた多摩区のリーダーの方が、なんとなく健康がお土産のように付いてくるんですねというような名言を残されていたということも、記憶に新しいところです。

## ボランティアによる効果、影響など



ボランティアですので、受け手への効果ということが非常に重要で、子どもや保護者の皆さん、また教職員の先生方がどうなのかということも、定期的にいろいろアンケートやインタビューなどをさせていただいていました。

そうすると、この読み聞かせの活動をすると、もう一回自分で借りたい絵本があるよと、あるいは、図書館で借りたよ、あるいは、よほど気に入ったら、ママに買ってもらいましたよという子も増えてきたりとか。あるいは、お年寄り全体に対するイメージが、この川崎市もそうですし、首都圏の子は3世代で暮らしている子というのは少ないのです。そうした子からすると、ボランティアさんを通してお年寄り全体へのイメージが、普通は年齢とともにだんだんひねてくるのですが、読み聞かせをずっとしてもらっているクラスの子は、1年、2年と維持されやすいということが分かりました。そうなれば、子どものメンタル面、情操教育にも役立っているのではないか。

また、保護者の方々も、これは以前、下布田小学校の保護者の方々に2年間にわたって調査にご協力いただいたのですが、やはり保護者の方々として、いろいろ学校にご協力することが負担な部分もあったりとか、あるいは逆に、ボランティアさんが参画していただいたことで非常に感謝しているとか、ありがたいという思いが出たということも、本当に貴重な研究もさせていただいたことがあります。

そういうことを考えますと、これから高齢者による学校のボランティアというものが非常に重要なのですけれども、大事なのは、点から線へ、線から面へと広がっていくことが重要かと思っています。例えば学校とか幼稚園、保育園といったような点、この点がどんどん線になっていく。また、その線が広がっていく、面に広がっていくということが、私は大事かなと思っています。そのためには、活動の場が重要だと思っています。

## 点から線へ、線から面へ　三方良しの地域づくりを作る

これも多摩区で以前やったモデル事業ですが、そういった小学校とか「わくわく」を中心とした活動ですが、それにたまたま参加していないような一般の市民の方もいらっしゃいます。また、これから子育てをしようという方とか、もう子育ては卒業した方もいる、地域にはいろいろな方が住んでいらっしゃいます。そこで、以前、中野島地区という、中野島駅の近くですが、そこのみまもり支援センターの方々と地元の地域包括支援センターの方々を中心に、町ぐるみで、多世代が交流したり、一緒にあいさつができたりするような地域をつくりましょうというプロジェクト、私は国の研究費をもらいまして、そこで一緒に社会実験をさせていただいたのです。これは、びっくりしているのですが、「中野島多世代つながり愛プロジェクト」といいまして、今日もずっと脈々と、我々の研究期間が終わった後も、地元の住民の方々が中心で続けていらっしゃるプロジェクトです。

では、どうしたら地域でそういうつながりができるのかということで、やはり目立つように、何かキャンペーンをしましょうということで、今もですが、中野島の駅前に、多世代でつながるといったキャンペーンの旗を立てられたり、Tシャツを作ったり、あいさつをするような活動を積極的にやっていく、そういうこともなさいました。

また、地域のいろいろなイベントでは、できるだけ多世代でやっているというキャンペーンもするということで、イベントとか日頃、目に留まるようにということでやってきたのですが、もう一つ、もう一押しする必要があるなということで、やはり場所が重要なのです。そういう拠点の中で、当時、ちょっと今、中野島の公民館は、建て替えがあって、この場所は今はなくなったと聞いているのですが、そういう居場所があると、多世代の人が集まってくるカフェができたりとか、何か本当に若い世代と高齢者の方が一緒に今でもノルディックウオーク、ポールウオークをされたりということで、その中で、先ほどの「りぷりんと」の方々は、読み聞かせをする時間も持っていらっしゃって、子育て世代の方に、絵本に関しては非常に興味がありますので、そういった勉強をするということも当時はやっていらっしゃったと聞いています。

その結果ですが、地域全体がどう変わるのかということが、私たちのモデル事業の一番の狙いで、その時に、中野島地区の我々がモデルとして入ってきた地域と、それ以外の多摩区の地域に何か変化があったのかということです。こちらのグラフで見ています介入地区というものが中野島のモデル地区で、それ以外の多摩区全域と比較した時に、3年間ですが、住民さん同士の信頼感やお互いさま意識が向上したということが分かったのです。

これは、何もそのプロジェクトに直接参加した方だけではなく、参加していることを遠目に見ていらっしゃる方もおられれば、町がなんとなく変わってきて、多世代の人がにぎやかにやっていらっしゃるなということを間接的に感じるような、そういった一般の市民の方にアンケートを送ったところ、間接的な人であっても、なんとなく町が温かくなったねといった意識が向上した、そういう見解をいただきました。

これは非常に国の事業としても評価していただいたのですが、やはり町ぐるみでいろいろずっと長く、点から線、線から面へと続けていく限り、地域自体が変わっていくのだということは我々も体感したことで、この寺子屋の事業も、この10年の歴史で、どんどん面へ広がっていっているのではないかと期待しているところです。そういうことで、この三方良しの地域づくりを作るには、これからも、できるだけ皆さん方がネットワークを広げて、面に広げていくということが実際にできるわけですし、それに期待したいと思います。

そのようなことで、私のほうの、始めのオープニングのスピーチは以上とさせていただきたいと思います。



# 寺子屋活動がもたらす心と体の健康

## 本日のトークテーマ

司会　地域の寺子屋事業は12年目を迎えまして、現在、小学校73校、中学校28校、ろう学校1校の102校で開講し、約1,300人の方が寺子屋に関わって活動をしていただいています。

本日も、既に地域の寺子屋でご活動いただいている方、これから寺子屋を開講しようとお考えの方など、さまざまな方にお集まりいただいていますが、これからの時間につきましては、「寺子屋活動がもたらす心と体の健康」をテーマに、参加者の皆さまでお話しいただきたいと思います。

登壇者

川崎市長　福田 紀彦
川崎市教育長　落合 隆
東京都健康長寿医療センター研究所　副所長　藤原 佳典

寺子屋コーディネーター
東小倉小　中島 守　　犬蔵小　山川 律子
菅生中　生駒 みを

市長　皆さん、よろしくお願いします。ちょっと私、気になってるのですが、だいぶこちら側の前のほうがすごく空いていて、後ろの方々がこうやって、ちょっと見えなさそうにしているので、もしよろしければ、どうぞ今のうちに移動されてはいかがでしょうか。寺子屋にも積極性が必要ですので（笑）。いかがでしょう。どうぞこちら側の後ろの方、いかがですか。ものすごく空いているのですが。大丈夫ですか。いいのですか。そんな、絡みませんから、大丈夫です。

では、よろしければ、このまま始めさせていただきたいと思います。まず、藤原先生、ありがとうございました。なんとなく、「そうだよね」という、概念的にはなんとなく自分たちの実感として分かっていたことを、理論的に、本当にお医者さまとしてお話しいただいたことに、すとんと落ちたような気がしましたが、まずは、3人の寺子屋に実際に関わっていただいている方々から、今、藤原先生からお話を聞いて、自分たちがやっていることと、どう親和性があるのかとか、そうだなと思うようなことがあれば、ちょっと感想じみたことをお聞かせいただければと思います。中島さんからよろしいですか。

## 藤原先生講話の感想



### 東小倉小 寺子屋コーディネーター　中島 守さん

はい、ありがとうございました。一番よかったなと思うのは、地域力が非常に大事だということで、それには毎日、週1、月1と、そういう流れで何をするのか、あれが非常にいいことだなと思いました。ただ、この中で一番大事だと思ったのは、場づくりで、場がないと、どうしても活躍というか、今言った週1、月1とかできないのですが、その場をつくるために、コーディネーターというか、それを仕掛けてくれる人がいないと駄目なのだと思っているのです。

だから、場づくりまでにいく前に、地域のどなたかがしっかりとコーディネートして、全部根回しして、場をつくっていく。そういう人材が継続していくといいなと思いました。非常に地域力はよく分かりました。

市長　ありがとうございます。

山川さん、私の地元犬蔵の方でありまして、いつも毒舌を吐いておられますが、今日は、後で毒舌が行くからと宣言されましたが、今日はやめてください。どうぞ、コメントをお願いします。







### 犬蔵小 寺子屋コーディネーター　山川 律子さん

寺子屋を始めて11年になります。30年ぐらい前ですか、おやじの会とか、いろいろ、退職された男の方が、家庭に落ち着いても、友達もいないし、出る場もないしということで始まったと思うのですが、寺子屋は、シニアの先生方で、最初の頃は、病院情報や近くのスーパー情報など探していたのですが、５～６年たったら、先生方が、本屋さんへ行っても、趣味の本のところよりも子どもの教材になる本のところに足が向くようになったとか、街を歩いていたり、テレビを見ていたりしても、これは寺子屋で使えそうだということに気が向くようになったとかというので、皆さん、若く、とても若返って参加してくださっているので、うれしいなと思います。

表を歩いている時に、街を歩いている時に、寺子屋先生に似ていらっしゃるな、でも、あんなにとぼとぼ歩いているのはおかしいなと思って追い付くと、そうなのです。でも、その先生方が、校門を入った途端にしゃきっとして、子どもたちの前ではすたすたと歩いているので、そういう意味でも、体力的にも体力づくりにもいいのかなと思っています。よろしくお願いします。

市長　ありがとうございます。藤原先生がおっしゃっていたこととそのままですよね。ありがとうございます。それでは、生駒さん、お願いできますか。



### 菅生中 寺子屋コーディネーター　生駒 みをさん

私は、コーディネーターと寺子屋先生も兼ねてやっていますので、その境界が分からないぐらいになっていますけれども、例えばミーティングなどをやりますと、ミーティングをやったりするために、いろいろな準備もありますし、終わった後にそれをまとめて報告する、そういったことも言ったり、きちんと皆さんの話を聞いて、時々難しい議論になったりしますが、それをうまく調整したりするところとか、そういったこともすごく大事な、頭を回転させたりすることとか準備などで、寺子屋をしていることが健康にもつながっているのだなと、今日はお話を聞いて実感しました。

市長　ありがとうございます。では、今度は教育長に振りたいと思いますけれども、教育長も、藤原先生のまず感想から言っていただけますか。

### 川崎市教育長　落合 隆



藤原先生、本日はありがとうございました。私は、先生のお話の中で、社会参加とか心の健康という辺りに、すごく興味深くお話を聞きながら、私も学校現場で5年間校長をしていましたので、自分の勤めていた学校のボランティアの方とか寺子屋の方の様子が思い浮かびながらお話を聞かせていただきました。

今、お話の中にもありましたように、寺子屋先生たちは本当に元気なのです。私の人生の先輩の方たちも多くいまして、その方たちのお話を聞いていると、子どもたちから元気をもらえる、子どもたちに分かりやすく勉強を教えるために、自分がもう一回勉強し直さなければというようなお声も聞き、子どもたちも、学校の担任の先生に話しかけるのと違う形で、違う表情なのですね。そこで関わっているので、子どもにとっても寺子屋先生にとっても、精神的にというか、気持ち的にすごくいい関係づくりができているのではないかと思いました。

教育長　長くなって申し訳ないのですが、もう一つ、読み聞かせの話もありましたが、私も、絵本の読み聞かせはすごく大事だと思っていました。先生がおっしゃったように、絵本には、メッセージ性というか、必ずテーマがあって、そのテーマをいかに子どもたちに分かるように伝えるかということで、年齢の上の方の読み聞かせの方が一生懸命練習してこられるのです。その様子を見て、私も絵本の読み聞かせを子どもたちにするようになった。そうすると、ボランティアの方たちが、校長先生の読んだ本コーナーをつくってくれたり、校長室に子どもたちが絵本を借りに来たりというように、子どもたちにとっても、ボランティアをしている年齢の上の方にとっても、すごくいい効果があるなと、あらためて、先生のお話を聞いて、校長をやっていた時代の5年間を思い出させていただきました。ありがとうございました。

市長　ありがとうございます。今、教育長のお話をされていて、皆さんがうなずいている、今、私たちはまだ議会中なのです。議会ではこんなにうなずいてくれませんよね（笑）。すごく気持ちいい感じでした。

しかし、体と心の健康というものは、両方、分離不可分ですよね。それこそ、西洋医学的に見ても、自律神経などのバランスが大事だといいますけれども、東洋医学的にも、エネルギーの巡りというか、そういうものが一緒になっていないと健康が維持できないということをよく聞きますが、まさに藤原先生はお医者さまでいらっしゃるので、医学的見地からも、こういう人のつながりが大事だということを、ずっと訴えておられると思うのですが、あらためて皆さんのお話を聞いて、一言添えていただけますでしょうか。

藤原　はい。恐らく、読み聞かせもですし、ボランティアの活動自体が、本番に向けて結構練習されたりとか、お勉強されていると、先ほど、生駒さんもおっしゃっていたと思いますが、やはりそこが1つは一番大きなポイントかなと思っています。



人間は、やはり練習して本番の前は緊張するのですが、この緊張が、ずっと緊張しっぱなしですと、それこそストレスホルモンが体に悪さをしますが、全くストレスがないということもまずいことであります。ですから、たぶん、ボランティアさんが子どもの前に出てしゃきっとされるというのは、あると気合が入るといいますか、自分自身に、いい意味でのストレスをかけられた瞬間なのではないかと思っています。

そういう意味で、めりはりがつくということがボランティアのいいところ。しかも、自分の日常空間ではない学校や中学校に入るというのは、緊張して当たり前なのです。そういうフレッシュな緊張を自然に体得できる機会として非常にいいのではないかと思っていました。

市長　ありがとうございます。適度な緊張ですよね。まさに山川さんが先ほど言ったように、校門に入ったらいきなりしゃきっとしていたという話がありましたが。

では、これから、それぞれのコーディネーターの皆さんに、ご自身の体験の中で、適度な緊張でもいいのですが、ご自身が活動されている中で、自分自身の健康や心や体の健康にどのような変化をもたらしたとお考えになっているのかということを、今度は順番を逆にして、生駒さんからいきましょうか。

## 寺子屋活動を続ける中での変化

生駒　すいません、私もずっと長くて、この活動は17年ぐらいになるので、いつ自分が変わったのかということはちょっと分からなくなって。今はなんとなくやっていますけれども、もともとそうだったわけではないと思います。いろいろな人たちと話をしたり、いろいろな考え方を持っている人たちがいる、それをやはりきちんと自分も認めて、そういう仲間という意識、地域の仲間、そういう気持ち。それとともに、子どもが中学生なので、昔は中学生は怖いという話を聞いたことがあるのですが、今は全然、中学生はかわいいです。怖いなんてとんでもなく、子どもたちは、何かあった時に、「俺、悪いことをしていたんだ」と言ってくれたりする。そういう関係や、寺子屋をやっている時でも、ちらちらとこちらを見てくれたりする。それから、学校の廊下で会った時も「あ、生駒っち」と、私は自分のことを生駒っちと言っているのですが、「生駒っち」と言ってくれたり。あとは、道で会ったりすると子どもたちが声をかけてくれるという、そういう子どもとの関係や地域の人との関係がどんどん広がっていくことが、私にとっては元気のもとになっています。本当に私は、うちに帰ったら、疲れてばたんと、どこでもいいから倒れて寝てしまうのですが、この寺子屋などがある時は、しゃきっとして、それで出ていったりしています。



市長　生駒さんは、それこそ寺子屋は17年目とおっしゃいましたけれども、その前から、こういう何かボランティア活動や地域の中での活動は積極的にやられていたのですか。

生駒　ものすごく積極的に、いつの間にか積極的になっていたのですが、本当はそういう人間ではなかったのです。いつの間にか、地域教育会議はずっと今もやっていますが、それとか、今は地域では、高齢者のためでもないのですが、おしゃべりサロンというものを月に1回、教育委員会と共催でやっています。それもいろいろな人が来るのですが、そのような活動はやっています。

市長　なるほど。なんだかハードルを上げてしまったかな。生駒さんのようにすごいスーパーマンでないとコーディネーターをできないというふうにハードルを上げてしまったかもしれませんが、大丈夫ですかね、普通の人でもなれますか。

生駒　いやもう、私は全然そういうことをやるとは、自分では夢にも思っていなかったのです。自分でやっていた仕事や、そちらのほうに熱中すると思っていたのですが、子育て中にいろいろな地域に顔を出しているうちに、こちらのほうが面白いなと思って、そういう感じで次から次から、いつの間にか、そういうことになってしまったのだなと思います。山川さんもそうですよね。

市長　では、山川さん、その流れでいってみましょう。

山川　私自身は、今、学校からある意味感謝されていることは、学校の先生が子どもを叱れないのです。昔、私たちの世代は、学校で先生に叱られたと言ったら、訳も聞かずに親から、そんなこと、何をしたんだと、もう一回怒られたりしましたが、今は本当に先生方が、子どもを叱るにしても、言葉を選んでいるうちに、どのように言っていいか分からなくなってしまうということをおっしゃっています。



私は、ガールスカウトやボーイスカウトで子どもたちをずっと見ていても、「こらっ」と言うことで通してきたので、怒り慣れているというか。寺子屋の時も、開講式の時に、私は叱る係ですよと。危ないことと皆に迷惑になることをしたら、必ず叱るからねと言うことから始まって、他の先生は優しいよと言っているのです。今でも、この間、もう出禁にすると言ったのが2人いるのですが、危ないことをされるのは、本人がけがすることも周りがけがすることも困るので、徹底的に叱っています。3年間叱り続けている子もいます。

グレーゾーンの子もいたりして、だから、叱り方が分からなくて、学校の先生に相談して、この子はどのように対処しているのですかということもやりながらですが、私個人的には、今一番、子どもを叱る時の注意が、昔みたいに頭ごなしに怒っていい時代ではなくなっているのが、やはりつらいですけれども、先生は、叱ってくれてありがとうございましたと、私たちはここまで出ているのですが言えないのですよということが、つい最近の会話でした。

市長　教育長、コメントしたいですよね。この前、2人でそういう話をしていたのです。なかなか厳しい時代で。ちょっと一度脱線しますが、コメントしていただけますか。

教育長　山川さん、ありがとうございます。本当に時代が変わってきて、非常に難しいところではあるのです。若い先生ほど、子どもの後ろにいる保護者の方が気になって、本気で叱れないところがあるかと思います。ただ、先生方には、子どもを育てているので、本当にいけないことをしたら、命に関わることとか、それは本気で叱ってあげないと、子どもがよく育たないので、信念を持ってやれば保護者も納得していただけるので、そこはきちんと考えていけばいいかなと思っています。

本当に、子どもは、ここにいる方には今さら言うまでもないかもしれませんが、学校で子どもたちが見せる顔と保護者に見せる顔と、また地域に見せる顔が違うのですね。ですから、寺子屋を通じて地域の方と子どもたちが関わることによって、学校では気付かなかった子どもの様子を知っていただけるとか、あるいは学校では相談できないことが、子どもたちは寺子屋先生には心を開いて言えるとか、そういった情報を大人が共有することで、いい育ちにつながるかと思いますので、ぜひそういう点でもご協力をいただければと思います。

市長　ありがとうございます。

山川　ちょっといいですか。

市長　どうぞ。

山川　そういうことで、学校で、クラスに入れなくなってしまい、1年間学校に来れなかった子どもがいるのですが、その前の年からずっと寺子屋には来ていた子なので、ちょっと欠席だけどと思って、親御さんに、病気でなければいいのですがということをLINEでしたら、実は、こういうわけで学校に行けていませんということで、すぐ学校に言って、寺子屋だけ来て構いませんか、学校はお休みでも寺子屋だけ来ていいですかと言ったら、校長先生たちも、お願いしますということだったので、1年間、お母さんやお父さんが、子どもが帰る時間、寺子屋のスタートの時に、ランドセルを布袋の中に入れて持ってきて、学校の校門を入る時に子どもにしょわせて寺子屋に来てということを1年やって、翌年から子どもはまた学校に戻っていて、今も元気に来てくれています。寺子屋ではそういう役割もできるかなと思っています。

市長　素晴らしいですね。今、教育長が言われた、学校での顔と地域の顔と親の前での顔がそれぞれあって、どこかでその接点というか、居場所をつくってあげるのはとてもいいことで、本当にありがとうございます。

もう一回戻って、中島さんのところで、中島さんのご自身の中で、寺子屋をやっていて、自分の健康にこういうふうにつながってきたという体験的なものを。

中島　変化はないのですが、たぶん、今のいろいろな健康状態を持続できているのは、週1回、火曜日ですが、寺子屋がある日はかなり緊張するのです。緊張して行くのですが、いろいろな出会いがあるわけです。子どもたちはすごく素直で、いろいろなことを話してくれるのです。家の料理はどうとか、聞かれても本当にいいのかなと思うこと、お父さんとお母さんの仲はこうとか、何も聞いていないのに、べらべらしゃべる（笑）。それがすごく楽しいというか、そういう場があるので、行く前はかなり緊張するのですが、行った後は、ああ、来てよかったなと、そういう、得したなという感じですね。



だから、そういう場を設けてもらったことは非常に感謝していまして、11年間、無事に健康で過ごせたのは、火曜日の寺子屋だと思っています。



市長　ありがとうございます。素晴らしい。聞いてもいないのに、いろいろなことを子どもたちがしゃべってくれるのは、すごく分かります。僕はまだ子育て中ですが、忙しいので、何かあったら早く言えとせかしてしまうのです。「5分で早く全部言え」というふうなことを言ってしまうので、「じゃあいいや」という話になって、結局話を聞いてくれないというふうになってしまうのです。でも、何かしゃべりたい、聞いてもらいたいという子どもたちの欲求はすごくあると思うのです。

生駒さんの話もそうですよね。生駒っちにちょっとあいさつして、ちょこっとこういうことを言ってみようという話が、受け止めてくれるところが、学校でもないところ、学校になっていたのですが、プログラムとしてそういう場があるということは、とても素敵な、子どもたちにとっていいことだと思うのですが、この辺りについて先生のコメントをいただいていいですか。

藤原　ありがとうございます。やはりコミュニケーションの多様性というものは、非常にすごい効果だと思っていました。

私どもは、コミュニケーションは、誰かとお話ししたりということは、当たり前のように過ごしているのですが、実はものすごく頭を使っているのです。人が言うことをしっかり理解して、それをいったん記憶にとどめて、同じことを言ってしまうと駄目なので、それに関して、今度はこう答えたらいいのかなということで投げ返すと、まるでキャッチボールになるのです。しっかり受け止めて、持ち直して、相手が取りやすいボールを投げてあげる、それの繰り返し。

とかく同じような世代、例えば高齢者の方が集まると、大体、言う雰囲気も分かっていますし、会話の内容も、例えば腰が痛いとか、高血圧の薬が増えた、減ったとか、大体ニュアンスが分かるのですが、先ほどの子どもたちとの会話は、どういうボールが飛んでくるか分からない。それをしっかり受け止めることで、自然に、ものすごく頭も心も使っていらっしゃる。また、子どもに理解できるように、やはり1年生と6年生は違うでしょうし、そこをきっちり投げ返されるというような、非常に巧みに頭を使ってコミュニケーションをされている、その機会が自然に寺子屋で毎日実現できているのではないかということを考えまして、非常にいい機会なのではないかと思いました。

市長　ありがとうございます。ちょっとここで教育長にお話を振りたいと思います。寺子屋があることによって学校活動にもいい面が出てくると思うのですが、学校に与えるいい影響と、地域にも与えているいい影響があるのではないかと思います。教育長から見たらどのように捉えておられるかということを、台本がないので、あれですが。

## 寺子屋活動が自分や地域に与える影響

教育長　ありがとうございます。寺子屋で学んでいる子どもたちの様子を私も見に行ったことがあるのですが、教室で普段、話をしない、あまり生き生きしていない子どもたちと寺子屋先生が関わっている場面を見た時に、アプローチの仕方でしょうか、学校の担任の先生は自分のやり方があるのですが、子どもそれぞれに応じて、10人いたら10とおりのアプローチの仕方があると思うのですが、寺子屋先生は余裕を持って子どもたちと関わっていらっしゃる、そのような印象を受けたのです。

ですから、この先生方の取り組みを見て、若い先生方が、自分を変える、変えられるか。要は、自分のやり方ではなく子どもに合わせるではないですが、そのようなテクニックというか、そのきっかけづくりにしていただけると学校が変われるかなと思います。

それから、地域との関わりで言いますと、先ほど、人とか場とか、プログラムをどう作るかとあるのですが、寺子屋に限らず地域の方が私のところに来て話していると、子どもたちの声を聞くと、元気に生き生きされるのです。低学年の子たちが、1人1鉢で花を植えていたりすると、時間があったらどうですか、手伝ってくれませんかと声をかけると、喜んで手伝ってくれるのですね。

ということで、地域との関わりという辺りでも、寺子屋での体験活動もそうですけれども、地域と学校の子どもたちをうまくつなげるような活動をつくってあげると、すごく活気づく、学校の1つの大きい空間になるのかな、そのような感じで思っています。

市長

ありがとうございます。藤原先生にもう一回戻したいのですが、先生はいろいろな各地でご講演もされたり、実際のプロジェクトをいろいろな地域でやっておられると思うのですが、こういう寺子屋の活動ですとかご自身の経験から、こういう場づくりや関係性づくりをやっているところは、地域がどのように変わっているという、いい事例ですとか、あるいは、私たちのような寺子屋に参考になるような事例がありましたら、ちょっとご紹介いただければと思います。

藤原



今日はちょっと時間の関係で割愛したのですが、例えば1つの例として、先ほどの読み聞かせの「りぷりんと」活動ですが、あれも20年前からスタートして、10年目の時に、一回、どのくらいの保育園や小学校、幼稚園で入っているかという地図に落としたものと、その地域の一般の方々の意識をちょっと測ったことがあるのです。そうしたところ、非常に面白かったのですが、まだ導入されていないところに比べて、2年目、5年目、10年目となってくると、長く導入されている地域の周辺にお住まいの方の、一般の、先ほどの地域力意識というものが高いということが分かりました。しかも、普通の大人の方に調査したのです。

ですから、たぶんそれは、寺子屋の皆さんもだと思うのですが、普通は小学校などは、保護者は出入りしていても、おじいさん、おばあさんの世代は学校公開日ぐらいしか出入りしないと思うのです。それが、いい意味で、定期的にシニアの方が通っていらっしゃるということは、実はものすごく目立つのですね。そのように目立って、あの方々はいつも定期的にボランティアで出入りされているなと。では、ここの地域は、ボランティアの方がいっぱいいて、安心して暮らせる地域かなというようなことを、たぶん、背中で見せていらっしゃったのだと。一部、そういうことを、研究として先ほど多摩区のほうではご紹介しましたけれども、それと同じことが、もっとたぶん、寺子屋のほうが多くの施設で、しかも多くのシニアの方が関わっていらっしゃるので、たぶん、寺子屋のある地域の方々は、ここは安心して暮らしやすい、地域力の高い地域なのだなと安心して、直接は関わっていなくても、そういう目で変わってきているのだと思います。

市長

そうですね。やはりこの10年で、川崎市の一番重要な政策として取り上げてきたのが、地域包括ケアシステムというものに取り組んでやっているわけですが、その地域包括ケアシステムというのは、一生懸命にやっているのです、ただ、どのように皆で評価して、どこまで僕たちの地域力が上がっているのかということが、やや見えにくいところがありまして、それをもう少し可視化できるようにこれからやっていかなければいけないねということで、今の地域力を、皆、地域の人たちで、どこが強み、どこが弱みということで、お互いに補ってピースを埋めていくというようなことをこれからやっていかなければいけないと思います。

先ほど藤原先生がおっしゃったように、子どもたちだけではない世界、地域の人たちが常に出入りしている、オープンな感じでコミュニケーションもとれているところは、やはり住み心地もいいし、安心感がすごくあると思うのです。そういうところに、もっともっと、寺子屋もそうですし、他のところも全部つながっているなという感覚が、結果、この町は住みやすいという形になるのではないかと思います。

藤原

今、市長がおっしゃったように、住みやすい町というのは、単に快適、便利というだけではなくて、いろいろな国内外の研究で、そういう地域に住んでいる人ほど、例えば健康長寿を全うしやすいとか、メンタルヘルスがきちんと保たれるということも分かっています。ということは、やはり住環境や地域環境というものは重要で、逆に言うと、周りの人は本当に心配な人ばかりがいると、日夜ぴりぴりしていないといけないとか。

あるいは、地域力のもう一つのポイントは、単に緊張感だけではなく、何かやろうぜとか、いいことをしようぜ、始めようぜと言うと、俺も俺も、私もという具合に、皆、集ってきてくださるのがもう一つの地域力なのですね。ですから、例えば皆さんが何か号令をかけられたり、仲間を募ろうとされたり、あるいは市がいろいろなキャンペーンをしても、地域によっては全然広がらないところもあったり、私も私もというように広がっている、これも地域力なのです。恐らく、この地域力が上がってきているということは、全ての



藤原

面で住みやすい。つまり、情報がきちんと行き届くと、それだけ安心、安全な情報も市民の一人一人に行き届きやすいわけですので、本当に地域力を上げるということが、急がば回れの地域包括ケアのゴールかなと思っています。

市長

そうですね。ありがとうございます。

中島さんは、僕が前にお話を聞いた時に、それこそ寺子屋を始める時に、町会の人たちに話したりとか、いろいろな方たちを巻き込んでということをやられましたよね。まさに、地域が変わっていろいろなところと結び付けていくという努力をされたと思うのですが、今、これだけやってきて、地域にどのような変化が起きているとお考えになられますか。

中島

今、学校区がありますね。校区をまたがって町内会とか自治会とかいろいろある、そういうものが連携してきているのですね。ですから、非常に1つの自分たちが住んでいるところと、隣の、全くそういうものがなかったら、行き来はしていても、顔も知らない。ところが、それが、寺子屋を通じて行き来するようになって、向こう側に住んでいる人とも。だから、非常にそういう点で、自分の住んでいる場所から広がっていくことがすごく大きな魅力だし、今まで、会っても知らんふりしていたのが、寺子屋で会って、隣の町内会の人だ、こんにちは、そういうふうになっているわけですね、もう10年たちますから。だから、そういうことはすごく大きいと思います。

大人が大人同士、地域で顔を合わせてあいさつできるということは、子どもとあいさつするのもうれしいですけれども、大人同士のあいさつというのもなかなかないですから、寺子屋を通じて「こんにちは」とか「どう？」と言える、あれはすごく素晴らしいと思います。

市長

ありがとうございます。最初は、この寺子屋のことを初めてやりましょうと言った時には、そんなに地域のこととか、あるいは、学び合うということがあったとしても、子どもたちに場だとか居場所だとか勉強の場所をということを思っていましたが、むしろ子どもたちからも教えられ、お互いに学び合い、そして地域にまで波及していくということは、当初、想定していなかったなという感じですが、山川さん、いかがでしょうか。

山川

今、うなずき過ぎました。本当に、最初に寺子屋を、市長の公約で始めると言った時に、どれだけ人が集まってくれるかなということがとても不安だったのですが、いろいろなところにチラシを配ったり声をかけたりしたら、大勢の方が集まってくださって、本当に皆さん、うちは11年ですが、続けてくださっていて、皆11年、年を取ったので、そろそろ若い人を入れなければということで、今、焦っているところです。

ただ、昭和の人間は素晴らしいです。本当に、先を見て動いたり、人のことを思ったりする人間が、申し訳ないけれども、平成だの令和には負けていません。学校の先生でも、若い先生は、ここまで言ったら、ここまでしかしてくれないの、次はこれが待っているでしょうということがたくさんあるのですが、昭和の寺子屋先生は、全然そんなものではありません。皆、先へ先へ動いてくれます。

本当に、いろいろなことで、自治会や何かともつながると、協力してくださる方も増えるし、話も広がって、お互いの助け合いができるようになってきているので、とてもいい場所だと思っています。まだの方はぜひ参加してください。

市長

いいコメントをありがとうございます。昭和、すごいですね。

では、生駒さんも、ちょっとコメントしていただいていいですか。寺子屋が地域に与えている影響ということについて。

生駒

この寺子屋は、菅生中学校区地域教育会議が運営しています。この地域教育会議が、今、地域力という話があったのですが、いろいろ、例えば、手つなぎまつりというお祭りを地域でやったりとか、音楽祭をやったり、それこそ多世代の人たちが集まるものを自分たちが企画して、何カ月も前から何回も企画会議を開いて準備して、地域の人を巻き込んでという、菅生じゅう、なるべく巻き込むという感じでやっているから、私たちがやっていること、これで地域をつないでいるのだなと思いました。

生駒　それから、菅生分館や、蔵敷、菅生こども文化センターがあるのですが、そういうところを拠点にしてつながっていく。
　だから、例えば寺子屋も、子どもたちが、私たちが寺子屋をやっている時に、試験がもう2 ～ 3日後になるけれども間に合わない。生駒っち、他のところで、僕のうちに来てほしいとか、そういうふうに言うのですが、それはできないので、こども文化センターでやりましょうかということで、こども文化センターにお話をして、そこに来てもらって、来れる人はおいでという感じでやったりする、そういうことも広がりができていたりします。
　地域教育会議をやっていたり、あとは、高齢者のためのおしゃべり、それは単なるおしゃべりだけではなくて、毎回プログラムを作って、おしゃべりだけの日もありますが、いろいろな、例えば健康に関することや、いろいろな社会の問題とか、詐欺にだまされないようにということをやったり、そういういろいろなことを企画して、それはそれで毎月やっています。すると、その高齢者のいろいろな人たちが来る、そういうところにもつながっているということで、私は、すごくいろいろな人とつながっていて、うれしいなと思っています。

市長　すごいですね。お1人で地域包括ケアシステムのような感じがします。でも、菅生中学校でやられていて、地域教育会議を母体としている、その特徴を最大限に生かされている取り組みだと伺いました。ありがとうございます。

生駒　もう一言言っていいですか。今、地域包括ケアのことで思い出したのですが、ある日、日曜日だったのですが、私たちは会議をやっていたのです。それはおいておいて、その時に私に電話がかかってきたのです。知らない人からの電話で、また詐欺かもしれないから出るのをやめようかなと思ったのですが、何か虫の知らせか、出たのです。そうしましたら、宮前区の消防署の救急隊なのです。「生駒さんですか」と言われて、そうですということで、誰々さんが、私の知り合いのお友達ですが、その人がコンビニで倒れて、めまいがして、お店の人が救急車を呼んだという話がありました。彼女はもう大丈夫になったのですが、ただ、少しMCIというか、認知がかかっていて、ご自分の住所が分からないとか、電話が使えなくなっているということがあって、救急隊の方が私に、今日は日曜日だから、いろいろな区役所に電話ができないから生駒さんに電話してくださいと言われて、私は地域包括ケアセンターに電話しても、皆、らちが明かなかったので、区役所に連絡しました。そうしたら、区役所の方が、分かりましたということで、その方を調べてくださった。分からないのですよ、電話もできないし、大体は住んでいるところは分かるので、ここだと思いますということで調べてくださいということで、それでつながった。そういう、救急隊の方が、すごいなというふうに、つながっているという。そのままにして帰ってしまったら、彼女は大変なことになっていたなと思いました。

市長　ありがとうございました。すごいですね。ありがとうございます。そのようなところにも生駒さんは出現している。感謝しかありません。ありがとうございます。
　先ほど教育長から、残り10分というのが、3分ぐらいまでいきましたので、せっかく藤原先生が来られていますので、会場の皆さんから、これはちょっと先生に聞いておきたいとか、若い人たちにも今日、来ていただいていますし、どなたでも結構です。あるいは、こんなことを私たちは登壇者に、このようなコメントが欲しいという方がいらっしゃいましたら、ぜひ。いかがでしょう。

## 会場からの質疑応答

来場者　先ほど先生にお尋ねした、互恵性とか互酬性とはどういう意味か、教えていただけますか。最後のページです。

藤原　漢字のイメージでして、「互恵性」というのはお互いに恵みありと。つまり、お互いにメリットがあるということですね。「互酬性」というのも、ちょっと同じ表現の字を間違って、「互恵」で統一したらよかったのかもしれませんが、意味は同じで、お互いに報いがあるという意味です。互恵性も互酬性も、両方とも、ウィンウィンといいますか、一石二鳥、お互いがメリットがあるという意味です。
　さらに、それがいっぱい、そういうお互いさまが増えてくると、地域全体の三方良しということで、そういう意味ですので、互恵性、互酬性とも、お互いにとってメリットがある、そういう理解でいただければと思います。

来場者　ありがとうございました。

市長　ありがとうございます。他はありますか。手が挙がっていますね。どうぞ。

来場者　今日はありがとうございました。寺子屋事業が私たち高齢者の心と体、それから地域、それからまた学校にとってもとても素晴らしいということがあらためて分かりました。
　その中で1つお伺いしたいのですが、私たちにとっては、私も寺子屋を今、やっていますけれども、週に1回、1時間という時間なのです。でも、1回1時間でも、とても緊張しますし、とても効果があると思うのですが、子どもたちが学校の中で授業を受けていますけれども、フルに受けている中で、子どもたちも、たった1時間しか寺子屋という授業には関われないと思うのですが、それでも効果はあると思いますが、子ども全体の教育という観点からすると、子どもにとって今の1時間だけの寺子屋授業は、どのように我々は評価をすればいいのか。ないよりはいいのはもちろん分かるのですが、学校で学ぶことが大変多い中で、この1時間だけというのはどのように考えたらいいのかということを、ちょっとお伺いしたいと思います。

市長　それはご意見として、もっと時間をつくったほうがいいというご意見なのか、そうではなくてですか。

来場者　それは分からないのです。私たちも、週1回1時間が、限度ではないですが、いっぱいいっぱいなので、子どもたちにとって、そういう学ぶことがたくさんある中で、寺子屋というものは、1年間を通してても、週1回の1時間というものが、あるいは学年も、学校にもよりますが、6年生まで寺子屋に参加できるところもあれば、低学年だけで終わってしまうところもありますけれども、教育ということからすると、子どもにとって寺子屋授業はどのように寄与しているのかなということです。

市長　なるほど、ありがとうございます。これはたぶん、教育長に答えていただければ。

教育長　ありがとうございます。短い時間ですが、先ほど川柳にもありましたけれども、子どもたちはすごく楽しみにして参加しているのです。まさに寺子屋で学んだことが楽しくて、勉強って楽しいな、もっとやってみたいなという意欲につながるという部分では、すごく効果があるかなということと、普段話さない子どもたち同士で交流し合えるということで、子どもたちレベルでの視野が広がるというのか、そういった辺りでも、人間関係づくりでもすごく効果があるかなというふうに感じています。

藤原

非常に鋭いというか、評価自体が難しいところだと思うのですが、先ほど私が紹介しました、多摩区での「りぷりんと」の読み聞かせなども、実際に小学校にしても、訪問できる時は週に1回、しかもお昼休みだけとか、朝の15分とか20分のこともあるのです。でも、そういう中でも、子どもたちが何を学ぶかというところで、確かに学力向上となると、やればやるほどいいでしょうし、そのためにはシニアの方が補助教員のような形で入ることもいいのかもしれないのですが、何をゴールとするか。私は、この寺子屋は、もちろん基礎学力の向上も大事だと思うのですが、シニアの方が、本当にメンターというか、全然違う角度から近所の信頼できる大人が関わってくださって、それは例えば他の地域で会った時にも「こんにちは」ができるような、そういうものが一番大事だと思うのです。その証しで、例えば先ほどは、1つは例えば高齢者に対する親近感とか、あるいは敬愛の念とか、絵本に対する、もう一回読んでみたといったようなものが、微量ですがデータでも出ていることがあるのですが、むしろ、もっとやはり長い間のお付き合いの中で、たぶん皆さんがやっていらっしゃることは、後でいぶし銀のように効いてくることがあるのです。



これも私は非常にうるうるしたドキュメンタリーがあります。私は非常勤で都内のある農業系の大学の講座をやっていまして、管理栄養士さんを育てる講座なのです。

そこの学部の学生さんに、地域での栄養教育や健康づくりのお話を1時間半ぐらい、年に1回するのです。その時に、スライドで、絵本というものは、例えば食事なども、実際に作らなくても、それでバーチャルにできるのですよということで、最後のほうに、多摩区での取り組みをご紹介していたら、授業が終わった時に、ある学生さんが来まして、これは下布田小学校でしょう、私、6年間ここで読み聞かせをしてもらったのですというような大学生が2年前にいたのです。その時の思いがあって、今、栄養実習をする時に、絵本を使って子どもに栄養を教えるというアイデアがずっと残っていたのですと。あるいは、時々思い返すように、親御さんと読み聞かせをしてもらったねというようなお話をしていたのですといって、お互いにびっくりして、ちょっとうるうるしたことがあるのです。

ですから、本当に、子どもの発達や発育に関する研究は、なかなかデータが取りにくく、逆に高齢者のほうは、割と短期決戦で分かりやすいのですが、そういうところで、いぶし銀のように、後になって、どうその子に残っているかということに対して、そういうエピソードをちょこちょこ聞くのです。ですから、本当に目に見えない部分があるのですが、たとえ1週間に1回でも、私たちはいつも、シニアボランティアさんは子どもたちにとってデザートみたいな存在ですよと。フルコースの勉強やスポーツをしている中で、このデザートがあるから、フルコースの後のおかずが食べられるのだということをよく言うのです。まさに皆さんの活動は、本当に大事なデザートの部分だと思いますので、自信を持ってやっていただけるといいかなと思いました。

市長

ありがとうございます。私も、データがどこの出典だか、ちょっと今、申し上げられないのですが、子どもたちが複数の居場所、あるいは大人との接点が、いろいろ数が多ければ多いほど、自己肯定感や自己有用感が高まる傾向にあるということ、これは子どもたちの調査だと思いますが、これは大人にも全く同じことが言えると思うのです。

だから、何か1つのことで全部をカバーしようということではなくて、複数のものを、なるべく多くの居場所や接点というものを作っていく。川崎でいうと、子どもたちにとっての非常に大きな核となっているのが、この寺子屋の活動だなと思っていて、とても感謝しています。

実は、時間を過ぎてしまいました（笑）。ということで、私のあれが悪過ぎて、せっかくの皆さまのコメントが、まだまだ、倍はしゃべれるという感じでしょうけれども、時間が来てしまったので、急にシャッターをガラガラという閉め方になりますが、どうしましょう、教育長からちょっとコメントをいただいてよろしいですか、締めのような感じで。

## まとめ



### 川崎市教育長　落合 隆

本日は、短い時間の中で貴重なご意見をありがとうございました。皆さんのお話を聞いて、今、関わっている目の前の子どもたちを大切にしたいという気持ちがすごく伝わってきました。目の前の子どもたちだけではなくて、寺子屋活動を通じて、地域の方との関係性もつくって、そういうつながりが、子どもも大人も、顔の見える関係性ができた、そういうつながっている地域は温かい地域になるのだなと思いました。

寺子屋でやっている学習や体験活動もそうですが、ぜひそういう活動を通して、今、子どもたちは、いろいろなことに活動を頑張っていますけれども、その子どもたちが好きなことが何か見つけられる、そして、自分はこれをやり続けてみようというような得意分野を増やしていけるような、そんな寺子屋であってほしいとも思っています。

でも、そういう地域は本当に温かい、住みやすい地域になるのだなということと、そのようないい体験をした子どもたちが、いずれ大学生、大人になった時に、大人の立場で寺子屋に戻ってきていただければいいなと思いました。本日はありがとうございました。

市長

いい締め方をしていただいたと思います。本当にありがとうございます。まずは、年末、お忙しい中、ご参加いただいた皆さんに感謝申し上げたいと思いますし、今日、登壇いただきました藤原先生、そして3人のパネラーの皆さんに拍手をお送りいただければと思います。皆さん、ありがとうございました。

